

『神戸新聞』 「随想」 2019年6月26日夕刊

日本人の姓を考える

中国や韓国・朝鮮は、今も昔も夫婦別姓である。日本も一八九八年の明治民法制定以前は、夫婦別姓だった。現在の夫婦同姓制度は、日本古来の伝統ではない。明治以降、西洋の習慣に合わせて採用された比較的新しい制度である。

だから夫婦別姓は、男女平等や個人主義とは無縁だ。女性が結婚後もずっと父親の姓を名乗り続けるのは、儒教の伝統である。

夫婦別姓に反対する人はしばしば、日本古来の伝統に根ざす家族の一体感の大切さを論拠にする。逆に夫婦別姓に賛成する人は、男女平等や個人の自立を重視する。しかしこれは、どちらもおかしいことだ。夫婦別姓こそが日本古来の伝統であり、しかもそれは男尊女卑・男系重視の習慣なのだから。

外国には、さまざまな姓の習慣がある。私のゼミにはこれまで、姓がない留学生が三人いた。それでも何ら不便なく暮らし、家族への思いもむしろ人一倍深かった。

中国や韓国・朝鮮にない日本古来の伝統があるとすれば、姓が極端に多彩なことだろう。地名や職名を次々に新たな姓にしてきたからだ。これは、とてもおもしろい日本の伝統文化だが、今でいえば「ポートアイランド」や「ユーチューバー」を姓に

するようなもので、かなり柔軟で斬新な感覚ではある。

今は国際結婚も増え、スポーツではサニブラウンさんやダルビッシュさんが活躍している。著名な日本文学者で日本国籍を取得したドナルド・キーンさんは、「鬼（きーン）」と名乗っていたそうだ。

今の時代、大切なことは、さまざまな価値観や出自・文化をもつ人が皆、生きやすい世の中を作ることだろう。そのためには、姓を法律であまり厳しく規制しない方がいいと思う。その方が日本古来の柔軟な伝統にあっている上、男女平等も実現しやすいだろう。